



2月号

# ひだまり

今月のエッセー

## 老師のコーヒー

私は、毎朝コーヒーをハンドドリッップで淹れるのが習慣となっています。お湯で蒸らしたコーヒー粉から立ち上る芳ばしい香り。サーバーの中に落ちるコーヒーは朝の光に照らされ、綺麗な琥珀色をしています。そんなコーヒーを淹れながら思い出すことがあります。

私が、コーヒーを好きになったのは、実は修行時代のことです。その時、4ヶ月程、吉峰寺というお寺に配属になりました。私がいた時には一人の老師が数人の修行僧の指導にあたり、一緒に生活をしていました。この老師が無類のコーヒー好きで、こだわりの豆を買っていました。しかしコーヒーを淹れるのは、当番

と呼ばれるその日朝食を作る担当にあたった修行僧の役割でした。当番の朝は忙しいのですが、坐禅と読経が終わる頃に、その香りがしてこない、大変機嫌が悪くなります。しかし、うまく淹れることができる、

「今日のコーヒーは美味しいねー!」と、仏様のような笑顔を向けるのです。その時の私は、怒られるのも怖かったです、その優しい笑顔と言葉が嬉しく、これも修行の一つだと思い、一生懸命コーヒーを淹れました。

コーヒーの面白いところは豆の量、お湯の温度、抽出時間が全て同じでも、その時の自分の心の状況で、その味が微妙に違うところです。実は、老師が褒めるコーヒーの味とは、そんな心の状況まで見透かして言っていたのかな、と今となってはそう思います。

今、老師が私のコーヒーを飲んだらなんといいだろうか。美味しいと言ってくれるかな。いや、こんなの飲めない!と、怒るだろうか。そんな、苦くもあり、懐かしい修行時代を振り返りながら、今日もコーヒーを淹れます。

◆深澤亮道

仏教のこぼれ

### 諸悪莫作

### 衆善奉行



これは「もろもろの悪をなすことなく、もろもろの善を奉行する」と読みます。意味は「悪いことをしない、善いことをする」というものです。

中国の詩人である白居易は禅に親しんでおり、ある時名高い道林という禅師に尋ねました。「仏教の大意とは何ですか」と。このとき禅師はなんと松の木の上で坐禅をしていたようなのですが、禅師はそこから答えました。

「諸悪莫作 衆善奉行」。白居易はそれに対して「そんなことなら三歳の子供でも知っていますよ」と返します。すると禅師は「ただ言

うだけなら三歳の子供でもできるじゃろうが、いざ実行となると、世の中の酸いも甘いも弁えた八十歳の老人でも難しいことだよ」と諭されました。

仏教における善とは自分にも他人にも共に喜びを与えること、悪とは自分や他人を傷つけ悲しませることです。

自分の行いは誰かを傷つけていないか。それは簡単に分かるものではありません。それでも互いに喜び合える行いをしていこう。この言葉にはそんな願いが込められているのです。

◆久松彰彦

## 編集後記

立春を過ぎたとはいえ、まだまだ寒い日が続きます。今月の初めには都心でも多くの雪が積もり、記録的な寒さも相まって話題になりました。

そんな中で「今年こそは」と期待されていた現象があります。凍りついた湖でみられる「御神渡り」という現象です。湖上をまっすぐに走る氷の隆起からは自然の雄大さが感じられます。中でも有名なのが長野県諏訪湖での御神渡りです。

近年は冷え込みが不十分なこともあって滅多に見ることはできませんでしたが、今年の大寒波で五年ぶりに御神渡りが現れたそうです。冬將軍もなかなか粋な贈り物をするじゃないか。春を待ちながら、そんなことを思うのでした。

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四



伊藤 正法さん

出身地…秋田県  
趣味…ドライブ



伊藤さん、  
本当にお世話になりました！  
修了おめでと〜うございますー！  
所員一同



3年間、ありがとうございました！

ルンビニの皆様へ



振り返ると、福井県にある永平寺や京都宇治の興聖寺での修行を終え、はじめて多くの人の前で法話をさせていただいたのが、このルンビニ合掌苑でした。緊張し、正直何を話したのか分からなくなったことを今でも覚えています。その時に、自分で何を伝えられたのだろうかと不安に思い、落胆する自分がありました。そんな中、在苑者の皆さんが新人の私へ気さくに「緊張して大変だったね、これからよろしくね」と声をかけて下さり安心したことをよく覚えています。ここで経験させていただいたことを糧として、これから様々な困難なことにも果敢に取り組み、頑張っていきたいと思えます。三年間、ありがとうございました。

合掌



お寺散策

成城山耕雲寺

今回ご紹介する耕雲寺は、小田急線成城学園前駅から徒歩八分程のところにあります。閑静な住宅街の中を歩いてゆくと、伝統的な本堂と現代建築が調和した境内が見えてきます。今からおよそ二九〇年前、旗本の頭領であり非業の死を遂げた水野十郎左衛門を弔うために、愛妾が出家をして耕雲寺を開創しました。以前は新宿角筈に伽藍をかまえていましたが、昭和二十二年に戦禍を受け本堂を一切消失し、昭和二十七年に世田谷砦の地に移転しました。

耕雲寺の特色は様々な行事です。写真の坐禅堂にて、毎朝六時半より坐禅会を行っています。また、毎週土曜日夕方の坐禅会では講話や座談会も行われています。他にも、毎月十七日は「観音様縁日」と銘打ち祈禱法要が行われ、第四土曜日には写経会も開いています。様々な行事を通して地域の人々の交流の場となる、そんな街のみなのお寺です。

◆ 本田真大



坐禅堂



境内

ひだまり書房



陰陽師

著 夢枕獏

最後に暗闇を恐れたのはいつだっただろうか。ぽつかりと空いた障子の穴や、裸電球の作る影法師。祭りの屋台裏に広がる鬱蒼とした茂みや、吸い込まれるような古井戸の底。この世ならざるものの気配に、ぞわり、と肌を粟立たせたのはいつだっただろう。

最後に宵闇を美しいと思ったのはいつだっただろうか。むせ返るほどに漂う夜桜の香りや、天幕越しに見えたアセチレンの灯り。あぜ道に広がる夜露のきらめきや、午前0時を告げる柱時計の音。この世ならざるものの気配に、ぞわり、と心を震わせたのはいつだっただろう。

古の京を舞台に、陰陽師・安倍晴明が織り成す妖しくも艶やかな伝奇物語。忘れかけていた闇の魅力を思い出させてくれる一冊です。

◆ 山内弾正